資　料

大阪信愛女学院短期大学紀要　52：B1（2018）

教育実習後の実習生に見られる教育現場への意識変化についての考察

A　Study of Changes in Awareness concerning Educational Field in Student Teachers after Teaching Practice

金井　秋彦

要　旨

実習生は教育実習を経験することによって実習や教育現場に対してどのような意識変化を示すのか、本学の学生へのアンケート調査を通して研究した。小学校教育実習、幼稚園教育実習それぞれの実習を終えた学生に対してアンケート調査を実施し、実習の様々な項目において実習前と実習後でどのように意識変化するか (または変化しないか) を調べた結果、両実習において実習後に教育現場に対して前向きな意識変化を示していることがわかった。さらに、小学校の実習生は実習後に先生に対する意識がより前向きに変化し、幼稚園の実習生は実習後に園児に対する意識がより前向きに変化する傾向があることが読み取れた。また、実習中にうまくいったと感じる経験ができ、手応えを感じるほど、教育現場に対して前向きな意識変化を示すこともわかった。

Keyword:　教育実習、意識変化、人間関係、指導教諭、園児（児童）

1．はじめに

例年、教育実習を終えた学生から様々な感想を聞く。なかでも、「思っていたよりうまくいった」、「授業を行うことは想像以上に大変だった」など、実習の前後で何らかの実習項目における意識の変化を口にする学生が多い。その変化の内容は、教育現場に対する意識が実習後に前向きに変化したケースもあれば、反対に消極的な方向へと変化したケースなど、学生によって様々である。普段はその実習前後の教育現場への意識変化を個々の学生から聞くだけに留まっているが、本研究を通して、学生全体の傾向はどのようになっているのかを調べ、その全体像を捉えてみたい。

先行研究としては、三島知剛氏の『教育実習生の実習前後の授業・教師・子どもイメージの変容』が挙げられる。この研究の概要は次のとおりである。まず、授業イメージ・教師イメージ・子どもイメージに関するメタファー項目を作成し、その因子分析を行うことによって量的に分析できる尺度を構成する。そしてそれを基にしてそれぞれのイメージの実習前、実習後の時期による分析を行い、それぞれのイメージがどのように変容するかを考察したものである。それによると、授業イメージに関しては、教育実習を経たことによって、授業を否定的でなく肯定的に捉えられるようになる傾向が見られ、子どもイメージに関しては、決まった見方ではなく、子どもの姿をありのままに見られるようになったなどの結果が出ていた。この研究も踏まえながら、本学の学生では実習前後でどのような意識変化が見られるのか、その原因も含めて考察する。

2．研究方法

本学の幼稚園教育実習は前半２週間を１回生９月に、後半２週間を２回生５月に実施している。また小学校教育実習は２回生９～10 月に行っている。今回の研究では、それぞれの実習を終えた対象学生全員に対してアンケート調査を実施し、実習の様々な項目における意識が実習前と実習後でどのように変化したか（または変化しなかったか）を調査する方法で行った。そのアンケート結果を基に、教育実習後の実習生に見られる教育現場への意識変化について考察した。

3　アンケート調査とその集計について

学生へのアンケート調査はそれぞれの実習を終えた時期に実施したことは前述の通りである。具体的には、幼稚園教育実習に関しては２回生５月の後半２週間の実習を終えた直後に、また小学校教育実習に関しては２回生 10 月の実習後に実施した。対象学生数は、幼稚園教育実習が 81 名、小学校教育実習が 26 名であった。

アンケート内容は、小学校教育実習が表１に示した通りであり、幼稚園教育実習が表４に示した通りである。両者とも、【問１】と【問２】において、回答者に実習や教育現場に関する 11 個の短文を読んでもらい、それについてどう思うかを実習前と実習後のそれぞれの状態で５段階評価 (選択肢 １～ 5) してもらった。選択肢番号が大きくなるほど、その短文

表１　小学校教育実習についてのアンケートの質問内容および集計結果

	アンケート質問内容	集計結果
【問１】	次の（ア）～（サ）の文章を読んでどう思うかを、**“小学校教育実習に行く前のあなた”**の立場（状態）で回答して下さい。回答は次の選択肢 1.～5. の中から最も近いものを１つだけ選び、記号で答えて下さい。 《選択肢》1. そうは思わない　2. あまりそう思わない　3. どちらともいえない 4. ややそう思う　5. そう思う **（ア）**授業には教師の指導力の差が大きく影響する。 **（イ）**良い授業になるかどうかは、授業前に教師がどれだけ準備をするかが大きく影響する。 **（ウ）**児童は実習生の私を好意的に迎えてくれる。 **（エ）**実習校の先生方は、実習生の私を好意的に迎えてくれる。 **（オ）**指導教諭の先生との人間関係はうまくいく。 **（カ）**今の児童が興味を持っている話題に対して、無理なくついていける。 **（キ）**私はどちらかと言えば小学校教諭に向いている。 **（ク）**良い授業になるかどうかは、児童の反応の良さや協力性が大きく影響する。 **（ケ）**実習生の私が行う研究授業は、児童にとって良い授業にはならない。 **（コ）**実習生が児童との関係を深めることは難しいことである。 **（サ）**実習に関してはプラスイメージ（期待感や充実感）よりもマイナスイメージ（不安感や苦しみ）のほうが大きい。	＜表２＞ 及び ＜表３＞ 参照
【問２】	**【問１】**と同じ（ア）～（サ）の文章を読んでどう思うかを、今度は**“小学校教育実習に行った後の現在のあなた”**の立場（状態）で、実習を振り返りながら回答して下さい。（一部の文章は過去形にしています）回答は先ほどと同じ選択肢 1.～5. の中から最も近いものを１つだけ選び、記号で答えて下さい。 《選択肢》1. そうは思わない　2. あまりそう思わない　3. どちらともいえない 4. ややそう思う　5. そう思う **（ア）**授業には教師の指導力の差が大きく影響する。 **（イ）**良い授業になるかどうかは、授業前に教師がどれだけ準備をするかが大きく影響する。 **（ウ）**児童は実習生の私を好意的に迎えてくれた。 **（エ）**実習園の先生方は、実習生の私を好意的に迎えてくれた。 **（オ）**指導教諭の先生との人間関係はうまくいった。 **（カ）**今の児童が興味を持っている話題に対して、無理なくついていけた。 **（キ）**私はどちらかと言えば小学校教諭に向いている。 **（ク）**良い授業になるかどうかは、児童の反応の良さや協力性が大きく影響する。 **（ケ）**実習生の私が行う研究授業は、児童にとって良い活動にはならない。 **（コ）**実習生が児童との関係を深めることは難しいことである。 **（サ）**実習に関してはプラスイメージ（期待感や充実感）よりもマイナスイメージ（不安感や苦しみ）のほうが大きい。	
【問３】	実際に小学校教育実習に行ってみて、行く前に自分がイメージしていた状況よりもうまくいったと感じることはありましたか？ 《選択肢》1. あった　2. なかった	1.　100% 2.　0%
【問４】	【問３】で「1. あった」と回答した人にお尋ねします。 「うまくいった」と感じた項目は具体的にどの分野のことだったか、次に挙げる項目群の中から選んで下さい。複数回答可能ですので、「うまくいった」と感じた項目全てを回答用紙に記入して下さい。 《選択肢》A. 研究授業　B. 児童との人間関係 C. 指導教諭との人間関係　D. 実習期間中の自分の健康管理 E. 児童への生活指導　F. 行事（運動会など）への協力	A.　33.3% B.　100% C.　75% D.　75% E　0% F.　50%

表２　小学校教育実習における実習後の意識比較

短文	実習後に前向きな意識変化を示した者	実習後も意識変化を示さなかった者	実習後に消極的な意識変化を示した者
（ア）	16.7%	83.3%	0%
（イ）	8.3%	91.7%	0%
（ウ）	58.3%	41.7%	0%
（エ）	66.7%	33.3%	0%
（オ）	66.7%	33.3%	0%
（カ）	58.3%	41.7%	0%
（キ）	50.0%	41.7%	8.3%
（ク）	0%	75.0%	25.0%
（ケ）	58.3%	33.3%	8.4%
（コ）	33.3%	66.7%	0%
（サ）	58.3%	33.3%	8.4%

に対する肯定感が強いことを意味する。集計にあたっては、回答者一人ひとりが各短文の捉え方において実習後にどのような意識変化を示したか（または意識変化を示さなかったか）に着目して行った。実習前から実習後への意識変化パターンとしては、当然次の３つが考えられる。

① 実習後に前向きな意識変化を示す
② 実習後も意識変化を示さない
③ 実習後に消極的な意識変化を示す

「前向きな意識変化」とは、実習や教育現場を肯定的に捉えたり、それらの環境における自分自身の関わりを高評価する方向への意識変化である。また、「消極的な意識変化」とは、実習や教育現場を否定的に捉えたり、それらの環境における自分自身の関わりを低評価する方向への意識変化を意味する。

回答者ごとに各短文の捉え方における実習後の意識変化パターン (①〜③) を調べた結果、各短文の意識変化パターンの割合は、小学校教育実習では表２のように、幼稚園教育実習では表５のようになった。なお、11 個の短文には逆転項目も含まれている。具体的には短文 (ク) 〜 (サ) が逆転項目にあたるため、それらの短文では、実習後に選んだ選択肢番号が実習前に比べ大きくなっていれば「消極的な意識変化」を示したことになり、小さくなっていれば「前向きな意識変化」を示したことになる。一方、短文 (ア) 〜 (キ) においては、実習後に選んだ選択肢番号が実習前に比べ大きくなっていれば「前向きな意識変化」を示したことになり、小さくなっていれば「消極的な意識変化」を示したことになる。そのことを踏まえた上で集計した結果が表２及び表５である。その集計結果を分析し、教育実習を経ることによって学生がどのような意識変化を示す傾向にあるかを導き出した。次項より実習の種類ごとにアンケート集計結果を考察してみたい。

4. 小学校教育実習に関するアンケート調査の集計結果からの考察

表１及び表２に示したアンケートの集計結果を、それぞれの設問ごとに詳しく見ていきたい。

【問１】と【問２】はその２つをセットとして捉えて考察する項目である。実習及び教育現場に関する同じ 11 個の短文について、実習前の捉え方（【問１】）と実習後の捉え方（【問２】）をそれぞれ５段階で回答してもらい、それぞれの短文の捉え方が実習前と実習後でどのように変化するのかを比較した。その比較を通して、実習を経ることによって実習生の教育実習や教育現場に対する意識がどのように変化するのかを調べた。比較結果は表 2 のとおりである。各短文ごとにどのような意識変化を示したかを、３つの意識変化パターンの割合によって表したものである。

３種類の実習後の意識変化パターンのうち、実習後に消極的な意識変化を示した者の割合が最も多くなった短文は１つもない。しかも、回答者の誰も消極的な意識変化を示さなかった短文が 11 個中７個を占めている。つまり、全般的な傾向として、実習生は実習を経ることによって教育現場に対して消極的な意識変化を示す割合は少なく、積極的な意識変化を示すか、意識変化を示さない割合が多い傾向にあることがわかる。

全短文中、前向きな意識変化を示した者の割合が最も多かったのは短文 (エ) 及び (オ) である。これらは共に実習校の先生との関係についての短文であることから、実習前には実習校の先生との関係にかなり不安を感じていたが、実習を経た後には実習校の先生方と良い関係を築けたと感じ、意識が前向きに変化したことを示している。次に前向きな意識変化を示した者の割合が多かった短文は同率で４つある。そのうち、短文 (ウ) と (カ) は共に児童との関係に関する内容であり、実習生の６割近くは、実習を終えた後には実習前にイメージしていたもの以上に児童と良い関係性を築けたと感じていることがわかる。残る２つの短文のうち、短文 (サ) の集計結果からは、実習後に実習に対するイメージがかなり良くなったことが伺える。つまり、実習を経験したことによって実習（＝小学校教育）に対する捉え方が前向きに変化していることがわかる。この論文の冒頭に述べた「思っていたよりうまくいった」という学生の思いが数字から読み取れるのである。また、短文 (ケ) は実習生が行う研究授業の自己評価を“児童のためになるか”という評価基準で回答してもらったものであるが、この短文についても 58.3％の実習生が前向きな意識変化を示した。指導教諭に事前に多くのアドバイスを戴きながらの取り組みではあろうが、実習生が実際に児童へ授業を行ってみた結果、予想以上に手応えを感じ、授業を行うことに対して前向きに捉えることができるように変化したことが集計結果に表れている。

また、短文 (キ)「私はどちらかと言えば小学校教諭に向いている」では、実習を経た実習生が小学校教諭に対する総合的な捉え方において前向きになったかどうかを測ることができる。この短文の集計結果は、表２に示した通り、実習後に前向きな意識変化を示した者が 50.0％、実習後も意識変化を示さなかった者が 41.7％、実習後に消極的な意識変化を示した者が 8.3％となった。この短文における「消極的な

表３　小学校教育実習アンケートにおける短文(キ)の実習前後の回答比較（実習前→実習後）

回答者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
前→後	２→３	３→３	１→４	３→３	３→２	３→３	２→４	３→４	２→５	１→４	３→３	３→３

意識変化」とは、実習後に“ 自分は実習前に思っていたほど小学校教諭には向いていない ”と感じたことを意味するが、そのような意識変化を示した者は全体からみると１割にも満たなかった。また、実習後も意識変化を示さなかった者についてさらに詳しく見てみると、意識変化を示さなかった実習生は実習前の段階で全員が選択肢番号３ (＝どちらともいえない) を選んでいた。つまり、実習前から自分が小学校教諭に向いているかどうかはっきりと判断できない状態であり、それは実習を経験した後も変わりなかったのである。実習前の回答に着目する観点に立つと、表３に示した通り、実習前に選択肢番号１ (＝そうは思わない)、または２ (＝あまりそう思わない) を選び、自分が小学校教諭に向いていないと判断していた実習生は、その全てが実習後に前向きな意識変化を示していたことが読み取れる。実習前に小学校教諭に向いていないと感じていた学生にとって、実習が前向きな意識変化を示す契機となっていたことがわかる。

一方、教師の授業に対する影響力についての短文 (ア)(イ) では、実習後も意識変化を示さなかった者がそれぞれ 83.3%、91.7%もおり、一見すると実習後に前向きになっていないように見受けられる。しかしこの両短文では、実習前から 91.7%の回答者が選択肢番号４ (＝ややそう思う) または５ (＝そう思う) を選んでおり、実習前から既に教師の授業に対する影響力の大きさを認めていた。つまり、実習生は実習に臨む前から既に教師の影響力の大きさを認識していたため、実習を経た後もその捉え方に変わりはなく、その結果として実習後に意識変化を示さなかった者が最も多くなったと考えられる。

短文 (ク) は、良い授業になるかどうかは、教師に拠るものではなく、児童の反応の良さや協力性による影響が大きいという認識の強弱を測る内容である。この短文は逆転項目にあたり、実習後にこの短文の肯定感が強くなると教育現場（ここでは「教師の役割」）に対して消極的な意識変化を示したことになる。つまり、この短文の肯定感を強めることは、授業の善し悪しに影響する要素として教師の影響力よりも児童の反応の良さや協力性の影響力をより重視していることを表しているからである。今回のアンケート調査では、この短文への肯定感を強めた者が 25.0%おり、肯定感を弱めた者は一人もいなかった。すなわち、実習後に 25.0%の実習生が教育現場（ここでは「教師の役割」）に対する意識を消極的に変化させたと読み取ることができる。しかしながら、この結果から消極的な意識変化をしたと安易に捉えることは危険かもしれない。なぜなら､授業は教員だけでなく、もちろん児童と共に行うものであり、教員の働きかけに対して児童が積極的に応えてこそより良い授業になると言えるからである。

続いて【問３】と【問４】の考察を行う。【問３】と【問４】もセットで捉える項目である。【問３】において、実習を経た後に自分が実習前にイメージしていた状況よりうまくいった項目があるかどうか尋ねた結果、回答した全ての学生が「あった」と回答した。さらに【問４】において、うまくいったと感じた項目について６つの選択肢から複数選択可で選んでもらうと、表１に記したような結果となった。最も高い項目は「B. 児童との人間関係」であり、全ての回答者がうまくいったと回答している。続いて高い項目は、75%がうまくいったと感じた「C. 指導教諭との人間関係」と「D. 実習期間中の自分の健康管理」であった。Ｄの実習中の健康管理がうまくいったと感じた学生が回答者の３分の２もいたことは、実習期間中は緊張の連続で睡眠時間も充分確保できず、体調を崩しやすいということを事前にしっかり把握し、健康管理に配慮しつつ実習に臨んでいたことが伺える。また、「E. 児童への生活指導」がうまくいったと回答した者が全くいなかったことは、実習期間中には生活指導をする機会がなかったか、もしくはそこまで踏み込んだ関係にはなれなかったものと考えられる。

なお、小学校教育実習では、実習生が入る学級に車椅子を使用するなど何らかの障がいを有する児童と接することがある。筆者が実習訪問で小学校を訪ねた際にも、見学した学級に車椅子を使用している児童や何らかの配慮が必要な児童が在籍していたケースは複数回あり、実習生はその児童への対応についても学んでいた。小学校教育実習でのそれらの体験を通して、実習生は特別な教育的ニーズを持つ児童に対してどのような支援や配慮が必要かを学ぶことができ、介護等体験へと繋がる貴重な経験をすることができる。このように、支援学校でなくとも、障がいを有する子どもと関わる機会は今後小学校においても益々増えると考えられ、実習期間から介護等体験も含めてそのような経験を積み重ねていくことは非常に重要なことであると言える。

5. 幼稚園教育実習に関するアンケート調査の集計結果からの考察

アンケート内容は表４に示した通りである。小学校教育実習の時と同様、それぞれの設問について詳しく見ていきたい。

幼稚園教育実習に関するアンケートの【問１】と【問２】は、小学校教育実習に関するアンケートのそれと全く同じ内容である。もちろん語句はそれぞれの実習に合うものに置き換えてはいるが、質問内容自体は両者とも全く同じである。

まず、表 5 に示したとおり、小学校教育実習に関するアンケート集計結果の時と同じく、３種類の実習後の意識変化パターンのうち実習後に消極的な意識変化を示した者の割合が最も多くなった短文は１つもない。

11 個の短文のうち、回答者の半数を越える者が前向きな意識変化を示した短文は４つあった。そのうち、実習後に前向きな意識変化を示した者が最も多かったのは、「今の園児が興味を持っている話題に対して無理なくついていける」かどうかを問うた短文 (カ) であり、65.2％の実習生が実習後に前向きな意識変化を示した。同じく園児に関する内容である短文 (ウ) も半数を越える 52.2％の実習生が実習後に前向きな意識変化を示したことを併せると、実習生は実習前には園児との関係に不安を感じていたが、実際に実習を経た後にはその関係がうまくいったことに自信を深めている様子が伺える。また、「実習生の私が行う設定保育は園児にとって良い活動にはならない」という設定保育に関する短文 (ケ) では 56.5％の実習生が実習後に前向きな意識変化を示している。実習中に設定保育を経験したことにより、園児の前で実際に行う設定保育に対して自信を深めた様子が見てとれる。実際に実習園を訪問した際に実習生の設定保育を見学することもしばしばあるが、園児は実習生の行う設定保育に熱心に取り組んでおり、当初の保育のねらいは概ね達成できていると感じることが多い。これには設定保育前に指導教諭から指導案に対する適切なアドバイスを受けたことや、設定保育中に指導教諭から適切なフォローを受けたことが大きく影響しているわけであるが、そのような助けを受けながらも実習生が設定保育を経験したことによって自信を深めたことは、非常に意義深いことであると言える。

一方、実習後に消極的な意識変化を示した者に着目して集計結果を見ると、短文 (キ) に注目することになる。実習後に消極的な意識変化を示した者が全短文中最も多く、且つ、実習後に積極的な意識変化を示した者が最も少ないためである。短文(キ)は、「私はどちらかと言えば幼稚園教諭に向いている」という内容の短文で、幼稚園教諭に対する適性を自己評価する項目である。集計結果では、実習後に自分の幼稚園教諭に対する適性評価を下げた者が全体の 30.4％に達し、適性評価を上げた者 (26.1％) を上回った。他の短文において、園児との関係や設定保育について実習後に前向きな意識変化を示す者が最も多くなる傾向が見られたなかで、それらの総合的評価とも言えるこの短文 (キ) において自分の幼稚園教諭に対する適性評価を下げた者が上げた者より多くなっている。この現象は、実習を経験することによって実習生としてはぞれぞれの項目で自信を深めて前向きな意識を持つことができるようになったものの、幼稚園教諭という将来の職業としての観点で振り返った時にはその適性が自分にあるとは言い難いと学生が感じていることの表れであると考えられる。それだけ幼稚園教諭という職業の重みを感じているとも言えよう。

次に、【問３】と【問４】についての考察である。【問３】は小学校教育実習のものと同じ質問内容であるが、【問４】の選択肢は一部小学校教育実習のものと異なっている。結果で注目すべきことは、【問３】の結果が小学校教育実習の場合と大きく異なっている点である。小学校教育実習では全ての回答者が「あった」と回答していたが、幼稚園教育実習では表５で示したようにその回答が２つの選択肢に大きく割れる結果となった。具体的には、「あった」と回答した者が 56.5％、「なかった」と回答した者が 43.5％であった。小学校教育実習では回答した実習生の 100％が実習でうまくいったことがあったと回答したことと比べると、半分近くが「なかった」と回答した幼稚園教育実習には実習生しか感じられない大変さがあるものと考えられる。今後この点についてさらに考察する必要があると思われる。そして、「あった」と回答した者に【問４】においてうまくいった項目を複数回答可で答えてもらったところ、表４に記したような結果となった。なお、ここでの割合 (％数) は、うまくいったことが「あった」と回答した全員を 100％とし、そのうち何％の回答者がその項目について「あった」と回答したかを示したものである。ここでも人間関係に関する項目が高い数値となった。うまくいったことが「あった」と回答した者の８割以上がうまくいった項目として挙げたものが、「B. 園児との人間関係」(92.3％) と「D. 指導教諭や他の先生方との人間関係」(84.6％) である。一方、「A. 設定保育」をうまくいった項目に挙げた者は 30.8％しかなく、実際に子ども達の前で保育を行い、うまくいったと達成感を感じられた者は３割程度に限られていること

表４　幼稚園教育実習についてのアンケートの質問内容および集計結果

	アンケート質問内容	集計結果
【問１】	次の（ア）～（サ）の文章を読んでどう思うかを、**“幼稚園教育実習に行く前のあなた”**の立場（状態）で回答して下さい。回答は次の選択肢 1.～5. の中から最も近いものを１つだけ選び、記号で答えて下さい。 《選択肢》1. そうは思わない　2. あまりそう思わない　3. どちらともいえない 4. ややそう思う　5. そう思う **（ア）** 設定保育には先生の力量の差が大きく影響する **（イ）** 設定保育がうまくいくかどうかは、活動前に先生がどれだけ準備をするかが大きく影響する。 **（ウ）** 園児は実習生の私を好意的に迎えてくれる。 **（エ）** 実習園の先生方は、実習生の私を好意的に迎えてくれる。 **（オ）** 指導教諭の先生との人間関係はうまくいく。 **（カ）** 今の園児が興味を持っている話題に対して、無理なくついていける。 **（キ）** 私はどちらかと言えば幼稚園教諭に向いている。 **（ク）** 設定保育がうまくいくかどうかは、子どもの反応の良さや協力性が大きく影響する。 **（ケ）** 実習生の私が行う設定保育は、園児にとって良い活動にはならない。 **（コ）** 実習生が園児との関係を深めることは難しいことである。 **（サ）** 実習に関してはプラスイメージ（期待感や充実感）よりもマイナスイメージ（不安感や苦しみ）のほうが大きい。	
【問２】	【問１】と同じ（ア）～（サ）の文章を読んでどう思うかを、今度は**“幼稚園教育実習に行った後の現在のあなた”**の立場（状態）で、実習を振り返りながら回答して下さい。（一部の文章は過去形にしています）回答は先ほどと同じ選択肢 1.～5. の中から最も近いものを１つだけ選び、記号で答えて下さい。 《選択肢》1. そうは思わない　2. あまりそう思わない　3. どちらともいえない 4. ややそう思う　5. そう思う **（ア）** 設定保育には先生の力量の差が大きく影響する **（イ）** 設定保育がうまくいくかどうかは、活動前に先生がどれだけ準備をするかが大きく影響する。 **（ウ）** 園児は実習生の私を好意的に迎えてくれた。 **（エ）** 実習園の先生方は、実習生の私を好意的に迎えてくれた。 **（オ）** 指導教諭の先生との人間関係はうまくいった。 **（カ）** 今の園児が興味を持っている話題に対して、無理なくついていけた。 **（キ）** 私はどちらかと言えば幼稚園教諭に向いている。 **（ク）** 設定保育がうまくいくかどうかは、子どもの反応の良さや協力性が大きく影響する。 **（ケ）** 実習生の私が行う設定保育は、園児にとって良い活動にはならない。 **（コ）** 実習生が園児との関係を深めることは難しいことである。 **（サ）** 実習に関してはプラスイメージ（期待感や充実感）よりもマイナスイメージ（不安感や苦しみ）のほうが大きい。	表５ 参照
【問３】	実際に幼稚園教育実習に行ってみて、行く前に自分がイメージしていた状況よりもうまくいったと感じることはありましたか？ 《選択肢》1. あった　2. なかった	3.　56.5% 4.　43.5%
【問４】	【問３】で 「1. あった」 と回答した人にお尋ねします。 「うまくいった」と感じた項目は具体的にどの分野のことだったか、次に挙げる項目群の中から選んで下さい。複数回答可能ですので、「うまくいった」と感じた項目全てを回答用紙に記入して下さい。 《選択肢》A. 設定保育　B. 園児との人間関係 C. 保護者との人間関係　D. 指導教諭や他の先生方との人間関係 E. 実習期間中の自分の健康管理　F. 園児への生活指導	A.　30.8% B.　92.3% C.　7.7% D.　84.6% E.　30.8% F.　23.1%
【問５】	２回の幼稚園教育実習を経験した今、実習未経験の１回生前期の頃と比べ、幼稚園教諭に対する意識に変化はありましたか？ 次の選択肢 1.～3. の中から最も近いものを選んで下さい。 《選択肢》1. 幼稚園教諭に対する魅力が増した（＝なりたい気持ちがより強くなった） 2. 幼稚園教諭に対する魅力が減った（＝なりたい気持ちが弱くなった） 3. 特に実習前後での意識の変化はない	1.　47.8% 2.　39.1% 3.　13.1%
【問６】	【問５】で 「1. 幼稚園教諭に対する魅力が増した」 と回答した人にお尋ねします。 実習を経て幼稚園教諭に対する魅力が増した最も大きい理由は何ですか？　選択肢 1.～5. の中から最も近いものを１つ選んで下さい。「5. その他」と回答した人は、具体的にその内容を記入して下さい。 《選択肢》1. 実習生として子どもに関わり、その可愛さを一層強く感じたから 2. 幼稚園教諭という立場で園児の成長を見守っていくことに対し、魅力やりがいを感じたから 3. 実習園の先生方が生き生きと働いておられたから 4. 幼稚園の「教育」という役割に興味を持ったから 5. その他	1.　36.4% 2.　45.4% 3.　0.0% 4.　18.2% 5.　0.0%
【問７】	【問５】で 「2. 幼稚園教諭に対する魅力が減った」 と回答した人にお尋ねします。 実習を経て幼稚園教諭に対する魅力が減った最も大きい理由は何ですか？　選択肢 1.～5. の中から最も近いものを１つ選んで下さい。「5. その他」と回答した人は、具体的にその内容を記入して下さい。 《選択肢》1. 実習生として子どもに関わり、ただ遊ぶだけでは駄目である事を実感したから 2. 幼稚園教諭という立場で園児の成長に関わっていく責任の大きさに対して自信がなくなってしまったから 3. 実習園の様々な職場環境(労働条件、人間関係等)に触れ、大変そうだったから 4. 保育実習も経験し、保育士の魅力のほうが大きくなったから 5. その他	1.　11.1% 2.　11.1% 3.　55.6% 4.　0.0% 5.　22.2%

表５　幼稚園教育実習における実習後の意識変化

短文	実習後に前向きな意識変化を示した者	実習後も意識変化を示さなかった者	実習後に消極的な意識変化を示した者
（ア）	47.8%	26.1%	26.1%
（イ）	43.5%	39.1%	17.4%
（ウ）	52.2%	39.1%	8.7%
（エ）	43.5%	34.8%	21.7%
（オ）	52.2%	26.1%	21.7%
（カ）	65.2%	21.7%	13.1%
（キ）	26.1%	43.5%	30.4%
（ク）	30.4%	43.5%	26.1%
（ケ）	56.5%	34.8%	8.7%
（コ）	47.8%	39.1%	13.1%
（サ）	34.8%	43.5%	21.7%

が集計結果からわかった。

【問５】は、２年間に分けて行われた４週間の幼稚園教育実習を終えた学生に対し、実習未経験の１回生の頃と比べ、幼稚園教諭への意識変化があったかどうかを問うたものである。幼稚園教諭への魅力が増したと回答した者が 47.8%と最も多かったが、魅力が減ったと回答した者も 39.1%に及んだ。そしてその２つの回答者に対し、【問６】または【問７】において、それぞれの意識変化に至った最も大きな理由を５つの選択肢の中から一つ挙げてもらうと、その結果は表４に記したとおりになった。「魅力が増した」と回答した者の理由で最も多かったのは、【問６】の集計結果にあるように、「２.幼稚園教諭という立場で園児の成長を見守っていくことに対し、魅力ややりがいを感じたから」(45.4%) であり、実習で幼稚園教諭という立場を間近に感じたことにより、その魅力をさらに強く感じたことがわかる。一方、実習を通して幼稚園教諭を間近に感じたことにより、却って幼稚園教諭への魅力が減ってしまった者も４割近くいた。【問７】の集計結果によると、その理由として最も多かったのが、「３.実習園の様々な職場環境（労働条件、人間関係など）に触れ、大変そうだったから」(55.6%) である。実習において間近に幼稚園教諭の多忙な仕事ぶりを見たり、実習園での様々な人間関係を目のあたりにしたりするなどの経験を経たことにより、幼稚園教諭の大変さを強く感じ、その職場に自分が将来身を置くことに不安を感じたようである。また、【問７】で「５.その他」と回答した者に魅力が減った理由を具体的に記入してもらったところ、「自分には合わないと感じたから」や「ピアノが弾けず、子どもの活動をうまく進められなかったから」などの回答があった。このように、同じように実習を体験しても、そこにやりがいを見出し、幼稚園教諭への魅力をさらに強く感じた者もいれば、反対に幼稚園で働くことの様々な大変さを感じ、幼稚園教諭への魅力を減少させてしまった者もいた。この違いは、実習中にうまくいったことがあったかどうかによって生じるのではないかと仮定し、実際にアンケート結果から見てみると、次のようになった。

まず、【問５】において「１.幼稚園教諭に対する魅力が増した」と回答した者のうち、【問３】で実習中にうまくいったことが「あった」と答えた者は 72.7%であり、「なかった」と答えた者は 27.3%であった。幼稚園教諭への魅力が増した者の７割以上が実習中にうまくいった経験を持っているため、傾向としては、「実習中にうまくいったことがあると幼稚園教諭への魅力が増す」という関係性があると言えるであろう。しかし、魅力が増した者全員が実習中にうまくいった経験を持っているわけではないため、両者に特別な強い因果関係があるとは言い難い。また、【問５】において「２.幼稚園教諭に対する魅力が減った」と回答した者のうち、【問３】で実習中にうまくいったことが「なかった」と回答した者は 66.7%を占めた。しかし「あった」と回答した者も 33.3%いたため、やはりこちらも「実習中にうまくいったことがないと幼稚園教諭への魅力が減る」ということは傾向としてはあるものの、両者に強い因果関係があるとは認められないと言える。結局のところ、実習を経たことによって幼稚園教諭への魅力が増したり減ったりする要因は、実習生それぞれが実習で経験したことをどのように受け止めたかにあり、実習生一人ひとりにそれぞれの要因があると言えよう。その一つが実習中に「うまくいった」と感じる経験をしたか否かにあるが、たとえ「うまくいった」と感じる経験を持てたとしても、それによって全ての者が幼稚園教諭への魅力を強めるわけではないということも申し添えておきたい。

6. 全般的考察

まず、実習前から実習後への意識変化では、実習生は実習後に前向きな意識変化を示す傾向が強いことがわかった。このことは、小学校教育実習、幼稚園教育実習共に当てはまり、表２及び表５からもわかるように、両者共に今回のアンケート調査ではいずれの短文においても実習後に消極的な意識変化を示した者が最も多くなることはなかった。尤も、消極的な意識変化を示した者が全くいなかったわけではないため、彼らがなぜ積極的な意識変化を示すに至らなかったのかを今後の研究で明らかにし、その対策について検討していく必要がある。しかしながら、普段、実習を終えた学生からは実習の大変さを聞くことが圧倒的に多いため、実習後には教育現場への意識が消極的に変化してしまっている学生が多いように漠然と思っていたが、実際のアンケート調査からはそれとは逆の結果が得られた。学生は実習の大変さを感じながらも、実習後には実習前に比べて教育現場に対する意識が前向きに変化していることがわかった。

このように、小学校教育実習と幼稚園教育実習において、実習生は実習を経たことにより共に前向きな意識変化を示しているが、もう少し詳しく見ると、両実習では前向きな意識変化を示す分野に傾向が見られる。

今回、実習前と実習後の意識変化を調べるアンケートでは、その質問短文を小学校教育実習と幼稚園教育実習で同じ内容にしている。（但し、語句はそれぞれの実習に合わせて変化させた。）その結果を小学校教育実習と幼稚園教育実習で比べてみると、指導教諭や実習先の先生との関係においては小学校の実習生のほうが実習後により前向きな意識変化を示している。短文（エ）（オ）において、小学校の実習生では66.7％が実習後に前向きな意識変化を示し、しかも実習後に消極的な意識変化をした者は一人もいなかった。それに対し、幼稚園の実習生で実習後に前向きな意識変化を示した者は、短文（エ）で43.5％、短文（オ）で52.2％となり、小学校の数値より14.5～23.2ポイントも少ない数値に留まった。しかも小学校の実習生にはいなかった実習後に消極的な意識変化を示した者が共に全体の21.7％いた。確かに、小学校教育実習の指導教諭は、実習生の研究授業までの指導案の練り直しを何度も行って下さったり、事前に何度も予行演習に付き合って下さったりして、非常に親身になって温かい指導をして下さっているケースが多い。このことは実習生自身からも良く聞き、筆者自身実習訪問に伺った際にもその様子を感じることが多い。また研究授業当日には大勢の先生方が見学に来て下さり、終了後の反省会ではその先生方がそれぞれにアドバイスを下さっていた。これらの先生方の熱心な指導に触れた実習生は、実習校の先生方と良い人間関係を築くことができたと感じ、その好印象が今回のアンケート結果に繋がっているものと思われる。

さらに、実習に対するイメージの実習前後での変化においても、小学校教育実習と幼稚園教育実習ではその変化の度合いに大きな相違が見られた。実習に対するイメージを問うた短文（サ）の実習前後の数値変化を両者で比較すると、表２と表５の比較からもわかるとおり、前向きな意識変化を示した割合が、幼稚園教育実習では34.8％に留まったのに対し、小学校教育実習では58.3％に達していた。幼稚園の実習生に比べ小学校の実習生のほうが実習イメージに対して強い前向きな意識変化をしたことがわかる。

また、【問３】において、実習でイメージしていた状況よりもうまくいったと感じることがあったと回答した者の割合を見てみると、小学校教育実習では「あった」と回答したものが100％に達していたのに対し、幼稚園教育実習では56.5％に留まっており、残りの43.5％は「なかった」と回答した。この結果から、実習を経験することによってより強い手応えを感じるのは小学校の実習生であることが伺える。

このように、小学校の実習生は、実習を経験することによって先生に対する意識がより前向きに変化し、実習に対するイメージにおいても実習後に前向きな変化を示した。また、実習における手応えを幼稚園の実習生より強く感じており、そのことによって、短文（キ）の結果にも表れているように、教諭に対する自身の適性について前向きな意識変化を示すに至った。

一方、幼稚園の実習生は園児との関係に対してより前向きな意識変化を示している。そのことは短文（カ）や短文（コ）における小学校の実習生の結果との比較からもわかる。また、授業や設定保育における先生の影響力の大きさについての認識を問うた短文（ア）（イ）の集計結果からは、幼稚園の実習生のほうが小学校の実習生よりも実習後に先生の影響力の大きさを感じていることがわかる。これは、幼稚園の実習生が設定保育を含めた実習を経験したことによって、小学校の実習生よりも先生の影響力の大きさをより強く感じた結果に他ならない。ただ、実習前の両者の短文（ア）（イ）の５段階評価の平均値を比較すると、小学校の実習生が4.58、幼稚園の実習生が3.85になっている。５段階評価の平均値が高いほどその短文に対する肯定感が強いことを意味しており、小学校の実習生は既に実習前から先生の影響力の大きさを強く認識していたことがわかる。その認識は

実習後も変わらなかったため、実習前の５段階評価の平均値が低めだった幼稚園の実習生のほうが実習前後の数値差が大きくなり、意識変化の強さが際立ったとも考えられるであろう。

7. おわりに

今回の研究により、本学の実習生が実習を経験することによって教育現場に対して前向きな意識変化を示すことがわかった。しかし、実習中にうまくいったことがあったかどうかという質問に対して、幼稚園教育実習の４割強の実習生が「なかった」と回答するなど、これまで気付くことのできなかった新たな事象も見つかった。全ての実習生が、うまくいったと感じることがあったと回答した小学校教育実習との違いはどこにあるのかなどに注目しながら今後考えていく必要があると感じた。そしてそのなかで得られた結果を活かし、事前事後指導において学生に有益な取り組みを提供できるように繋げていかなければならない。今回の研究は、教育実習に関わる立場の者として、教育実習の持つ影響力の大きさを再認識できた機会となった。

引用文献

三島知剛：教育実習生の実習前後の授業・教師・子どもイメージの変容，日本教育工学会論誌 Vol.31(1) p.107～114（2007）

参考文献

篠原一彦：教育実習生の不安に関する一考察，佐賀大学教育実践研究，第 31 号　p.225～236（2014）

受理　2018 年 3 月 2 日
公開　2018 年 3 月 23 日
＜連絡先＞
金井　秋彦
〒536-8585　大阪市城東区古市 2-7-30
大阪信愛女学院短期大学
akanai@osaka-shinai.ac.jp